

中大クロニクル ～もっと知りたい！大学史～

『草のみどり』 誌名の由来

Vol. 1

本誌『草のみどり』は、キャンパスの空気と教育や課外活動の諸側面を知り、親子で学生生活について考え、ともに語り合う契機として創刊されたものです。準備号の刊行を経て、創刊は1983年6月。当初は判型が今より小さく、表紙とグラビアのみがカラーでしたが、現在はオールカラーです。創刊当初の表紙には、自然の風物が取り上げられ、当時の読者の目に留まったものと思います。

さて、本誌のタイトルの由来について、皆さまはご存知でしょうか？ 誌名の「草のみどり」とは、実は現在の校歌の冒頭の一節にあたります。本学の校歌にも歴史があり、現校歌で3曲目になります。1921年に制定された最初の校歌は、その一節から「五千の学徒」と呼ばれました。本学が創立の地、神田錦町にあった時代です。続く第2の校歌は、1926年に制定されたもので、歌詞の歌い始めから「皇国の礎」（みくにのいしずえ）と呼ばれました。折しも、1926年8月には錦町から駿河台への校舎移転が済んだ時期でした。作曲は、音楽家として著名な山田耕

侅が務めました。残された関係資料によれば、同年11月には曲作りが終了していたとのことです。

そして現校歌は、戦後の1950年8月15日に発表されました。当初、これは学生自治会による公募方式によって作品を募ったものでした。しかし、2度の公募も入選作に恵まれず、歌詞は独文学者の石川道雄の校歌案をもとに審査委員の大場俊助が手を加え、共作の形で完成をみたものでした。なお、当初の石川案では歌い始めが「丘はみどりに草萌えて」となっていました。この点が、現校歌と異なる点です。

「草のみどりに」の一節から始まる校歌は、卒業式・入学式をはじめ、記念すべき行事にあって歌い継がれ、現在に至りました。一方、校歌の一節をタイトルに加え、本誌は創刊されました。石川、大場という2人の作詞者の思いが校歌に託され、その思いを受け継いで本誌『草のみどり』が誕生に至ったものでしょう。創刊から40余年が過ぎました。

[中央大学資料館事務室]



『草のみどり』創刊号（1983年6月20日）

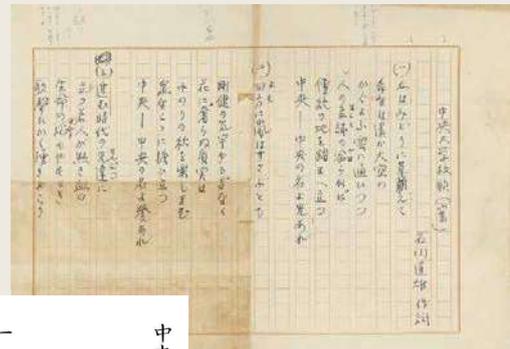


1950年代の駿河台校舎

中央大学校歌
作詞 石川道雄
作曲 坂本良隆

一草のみどりに風薫る
丘に目映き白門を
暮れ集える若人が
真理の道にはげみつ
つ
栄ある歴史を承け伝
う
ああ中央 われらが中央
中央の名よ光あれ

中央大学校歌（1番抜粋）



石川道雄「中央大学校歌（案）」